
汚泥

阿波野治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汚泥

【コード】

N2106M

【作者名】

阿波野治

【あらすじ】

生まれて初めて彼女が出来た。その彼女が、今日、僕の家遊びに来ることになった。

生まれて初めて彼女が出来た。数日前まで、親しく接する妙齡の女性が二次元の世界と脳内にしかいなかったことを考えると、嬉しいことは確かに嬉しいのだけど、同時に変な気持ちでもある。

その彼女が、今日、僕の家遊びに来ることになった。

彼女に見られても恥ずかしくないよう、部屋とトイレを掃除する。特に後者は長らく清掃していなかったたので、見違えるほど綺麗になった。清々しい。これで準備完了。彼女を待つ。

約束の午後五時きっかりに彼女が家に到着した。黒の毛皮のコートに、手編みだというピンクのマフラーという、いつもの恰好だ。曰く、外は寒かったらしい。

玄関で少し立ち話をする。緊張で上手く呂律が回らない。口振りこそ普段通りだけど、彼女も少し緊張しているようだ。

暖房の効いたリビングに案内する。住んでいるアパートにはないらしく、彼女はコタツがあることに喜んでいて。彼女はコタツに足を潜らせ、僕はダイニングに向かう。彼女が好きなココアを淹れるためだ。

二つのカップにココアの粉を入れる。ポットからお湯を注ぐ。スプーンで軽くかき混ぜてやる。出来上がり。これでココアが切れてしまったが、棚に買い置きがあるので、おかわりを頼まれても大丈夫だ。両手にカップを持ち、リビングに戻る。

彼女はコートとマフラーを脱ぎ、白いセーター姿になって、コタツの上でみかんを積み上げて遊んでいた。目が合う。彼女は取り繕うように照れ笑いを浮かべ、慌ててみかんの山を崩してカゴに戻した。その美しくも無邪気な微笑み、まるで純白の天使のようだ。

コタツに入る。ココアを勧める。それぞれのカップに注がれたそれを飲みながらお喋りする。内容はたわいなく、普段と大差ない。彼女の緊張は依然としてほぐれないらしい。両脚をしきりに動か

しているせいだろう、コタツの布団が落ち着きなく微かに蠢いている。ただし話しぶりはいつもと変わらない。対する僕は、座り方こそ安定しているけど、喋り方が未だにどこかぎこちない。

そんな二人が、温かいココアをすすりながら、上面だけはいつもと同じような調子で言葉を交わしている。緊張を胸の内側に隠して喋りつつける。他愛もない会話はどこまでも続く。

やがて彼女が、お手洗い借りていい、と訊いてきた。尿意というより、緊張をどうにか処理しようとしているのかもしれない、と思った。断る道理はない。どうぞご自由に、と返す。彼女はコタツから抜け出して腰を上げ、真っ直ぐにトイレに向かう。

何気なく彼女のカップを覗き込むと、ココアが空になっている。トイレのドアに手をかけようとしていた彼女を呼び止め、ココアのおかわり淹れておこうか、と提案した。すると彼女は、遠慮からか一瞬逡巡したあと、じゃあお願い、と一言答えてトイレに入っていた。

彼女のカップの柄を握り、ダイニングに向かう。ダイニングとトイレの距離は間近い。洋式便器のフタが開けられた微かな物音が耳に入った。

戸棚を開け、新しいココアの袋を探したが、どこにも見当たらない。買い置きがあったというのはどうやら記憶違いで、実際は新しいココアは買っていなかったようだ。

さて、どうしようか。無いものは仕方がないから、この場のおかわりは諦めてもらうしかない。でも、ああ言っておいて何もしないのも不親切だから、代わりにホットコーヒーでも淹れておこうかな。

そこまで思索した時だった。

ポブツ……ブビュリブリブリブツ……ミチミチミチ……ブボツ……プウーッ。

周囲の空気が静まり返った。全身が金縛りに見舞われ、思考が氷

結する。

その音は、トイレのドアの向こう側から聞こえてきたその異音は、大便を肛門から排泄する際の音と、それに伴う放屁の音に違いなかった。

非常なる現実。その到来に伴って崩壊する理想。瓦解する偶像。墜落する純白の天使。

やり場のない激情が胸中で渦を描いていた時間は、一分にも満たなかったと思う。

僕はカップを床に叩きつけると、勢い良くトイレの扉を開けた。内鍵はかかっていなかった。便座に腰を下ろす彼女が、表情に驚愕の色を浮かべ、両腕を縮めて胸に押し当てた。

黒のショーツが足首まで下ろされている。局所が露わになっている。異臭が鼻をつく。開いた太股の隙間、便器の内側に溜まる水の底に、醜悪なドス黒い塊が沈殿しているのが見える。

セーターの胸倉を掴む。強引にトイレから引きずり出す。彼女が呆気にとられた表情で僕の顔を見返してくる。その視線を振り払うように、感情に任せて叫ぶ。

「なに尻の穴から汚いもの出してやがるんだ、メス豚風情が！
出て行け！ 今すぐこの家から出て行け！ この売女！ 淫売！
売笑婦！ ケータイ小説しか読まないくせに読書家気取り！」
有りつ丈の罵詈雑言を浴びせながら、有無を言わせず彼女を玄関の方向へと押しやっていく。

今思えば、何が受け入れ難かったのだろうか。女性が大便を排泄するという現実が心情的に許せなかったのか。それとも、彼氏の、しかも出来たばかりの彼氏の家で堂々とウコをする無神経さが気に障ったのか。

「死ね！」

彼女を部屋の外まで追い出すや否や、痛烈な捨て台詞と共にドアを閉めた。

これも今になってみればだけど、マフラーとコートを部屋に残し

たまま外に追いやられて、彼女は帰り道、大層寒い思いをしたことだろう。あの様子では、肛門の縁に付着した便をまだ拭っていないかったのだろうし……。

ドアの鍵をかけた僕は、崩れ落ちるようにしてその場に座り込み、泣いた。ただただ涙した。やがて漂ってくる異臭に気がついて、すつくと立ち上がった。二オイの発生源まで足を進め、何も言わずにトイレの水を流した。その際に認めた便器の中の大便が、下痢気味の時特有の形の崩れたそれだったことだけはハッキリと覚えている。

翌日から、僕と交友関係を持つ人々の間で、僕に関する悪い噂話が流れ始めた。彼女が用を足している最中に僕がトイレに闖入した、という噂だった。その噂を流したのは、間違いなく彼女だろう。けれども、ソコをしている所ではなく、トイレをしている所に侵入してきたという話になっているから、彼女は真実を正確に伝えていないことになる。

しかしその事実は事実だから、僕はその噂を全否定することはしなかった。その御陰で、友達みんな僕のことを避けるようになった。離れていった。噂の真相を、真実を、もう一人の当事者である僕に直接訪ねることもせず、彼女の言い分ばかりを鵜呑みにして。

唯一、僕が一番の親友である男だけが、どうしてそんなバカな真似をしたのか、と訊いてきた。それに対して僕は、掃除したばかりのトイレを汚されたのが気に食わなかったただけだ、と答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2106m/>

汚泥

2010年10月8日14時33分発行